

第33回名曲コンサート

PROGRAM

オール・ベートーヴェン・プログラム

Ludwig van Beethoven

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 op.73 「皇帝」(約40分)★

Piano concerto No.5 in E flat major, op.73, "Emperor"

第1楽章 アレグロ Allegro

第2楽章 アダージョ・ウン・ポコ・モート Adagio un poco moto

第3楽章 ロンド:アレグロ・マ・ノン・トロツポ Rondo: Allegro ma non troppo

— 休憩 (20分) — Intermission

交響曲 第6番 へ長調 op.68 「田園」(約45分)

Symphony No.6 in F major, op.68, "Pastorale"

第1楽章 「田舎に着いた時の愉快的気分」 アレグロ・マ・ノン・トロツポ
Angenhme, heitere Empfindungen,welche bei der Ankunft auf dem Lande im
Menschen erwachen : Allegro ma non troppo第2楽章 「小川のほとり」 アンダンテ・モルト・モート
Szene am Bach : Andante molto moto第3楽章 「田舎の人たちの楽しい集い」 アレグロ
Lustiges Zusammensein der Landleute : Allegro第4楽章 「雷と嵐」 アレグロ
Donner. Sturm : Allgro第5楽章 「牧歌、嵐の後の喜びと感謝」 アレグレット
Hirtengesang. Wohltätige, mit Dank an die Gottheit verbundene Gefühle nach dem
Sturm: Allegretto

指揮:ロベルト・フォレス・ヴェセス Robertp Forés Veses, Conductor

ピアノ:シプリアン・カツァリス Cyprien Katsaris, Piano (★演奏曲)

管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2015 10/17(土) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

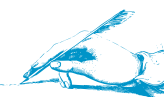
飯尾 洋一(音楽ライター)

対照的な性格を持ったベートーヴェンの二大名曲

「傑作の森」と評されるベートーヴェンの中期の傑作群から、2曲が演奏される。ピアノ協奏曲第5番「皇帝」は、その愛称にふさわしく、全編にわたって雄大で壮麗な曲想にあふれている。曲の冒頭から独奏ピアニストが登場し、華やかな技巧を発揮する。協奏曲なので主役はピアニスト。しかし主役を支えるオーケストラのパートもドラマティックで、両者が一体となって白熱した音楽を作り出す。

一方の交響曲第6番「田園」では、田舎を訪れた際に感じる安らぎや喜びがテーマとなっている。第2楽章での小川のせせらぎや小鳥たちの鳴き声、第3楽章での田舎のお祭り、第4楽章の雷雨など、描写的なシーンも満載。田園情緒をたっぷりと味わえる。

闘争的な「皇帝」と、リゾート気分ですとどきの田舎暮らしを楽しむ「田園」。ベートーヴェンの2つの顔が見えてくる。

ライター
おすすめ「必聴ポイント」

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 op.73 「皇帝」

いきなり独奏ピアノが華やかに登場!

第1楽章冒頭、オーケストラの力強い総奏が鳴るやいなや、独奏ピアノが華麗なパッセージを披露する。これぞまさに「皇帝」というきらびやかさ。

ベートーヴェン:交響曲 第6番 へ長調 op.68 「田園」

ひなびた田園情緒を堪能

第1楽章で描かれるのは「田舎に着いた時の愉快的気分」。穏やかで広大な田園地帯の風景が目に見えてくるかのよう。これから休暇をくつろぐ気分で聴きたい。

ピカッ!ゴロゴロ……嵐がやってくる!

第4楽章では「雷と嵐」が表現される。やさしいばかりが自然にあらず。強風が吹き荒れ、雷鳴がとどろく。荒れ狂う天候を描くオーケストレーションに注目。

PROGRAM NOTE



曲目解説 — 演奏をより深く楽しむために 飯尾 洋一(音楽ライター)

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 op.73 「皇帝」

初演:1811年11月28日 ライプツィヒ

フランス軍に占領されたウィーンで作曲

いかにも「皇帝」の名にふさわしく壮麗でヒロイックな楽想を持った協奏曲だが、この題は作曲者が添えたものではなく、出版社が作品の印象をもとに与えたもの。見事に作品内容を言いあらわしており、すっかり曲名として定着している。

作曲は1809年。当時、ウィーンはナポレオン軍の進軍により戦乱に巻き込まれていた。ウィーンを完全包囲したナポレオン軍はすぐにシェーンブルン宮殿を占拠し、ウィーン全域の開城を要求した。これが拒絶されると本格的な戦闘に突入し、フランス軍はウィーンを中心部を砲撃した。ベートーヴェンの住居の近くにも砲弾が落ち、作曲家は地下室へと避難したという。

フランス軍がウィーンを占領した後、やがて休戦協定が結ばれたものの、ベートーヴェンの支援者である貴族たちはこぞって疎開してしまい、ウィーンから音楽活動が途絶えてしまう。苦境のなかでも創作力を爆発させたベートーヴェンは、最後のピアノ協奏曲となるピアノ協奏曲第5番「皇帝」を書きあげた。初演は完成から2年半を経て、ライプツィヒにてフリードリヒ・シュナイダーの独奏で実現した。

あたかも作曲時の苦難を打ち破ろうとするかのように、作品は雄渾^{ゆうこん}壮大な力強さにあふれている。交響曲並みのスケールの大きな管弦楽と、華麗なピアノ独奏の対話が、これまでだれも書くことのできなかつた大規模で絢爛たるピアノ協奏曲を生み出した。

第1楽章はアレグロ。冒頭の総奏に続いてすぐに独奏ピアノが登場し、華麗なパッセージを奏でる。従来の伝統的な古典派協奏曲のスタイルであれば、ひとしきり管弦楽が提示部を演奏した後によく独奏ピアノの出番が巡ってくるのが常だが、ベートーヴェンは慣例を破って、早々に独奏者に活躍の場を与えた。同じ趣向は前作のピアノ協奏曲第4番にも垣間見える。聴衆の「少しでも早く独奏者の演奏を聴きたい」という欲求を優先してくれる、サービス精神旺盛な新機軸とでもいうべきだろうか。推進力みなぎる管弦楽の主題が続き、雄大な楽想が展開される。

協奏曲の第1楽章では、終盤に独奏者が即興的に技量をアピールするためのカデンツァが配置されるのが通例であったが、ベートーヴェンはこれを廃し、カデンツァを作品本体と一体化することで、作品の統一感を優先している。

第2楽章はアダージョ・ウン・ポコ・モツォ。瞑想的で穏やかな主題で開始され、これが次々と変奏される。最後にピアノが終楽章を予告するフレーズを奏でて、切れ目なく終楽章へ突入する。

第3楽章はアレグロ。躍動感あふれる主題で開始され、曲はエネルギッシュに高潮する。ピアノと管弦楽が掛けあいを繰り返しながら輝かしいフィナーレへと突き進む。

楽器編成

独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部



ベートーヴェン:交響曲 第6番 へ長調 op.68 「田園」

初演:1808年12月22日 ウィーン

豊かな自然が心にもたらす喜びの感情を描く

多くの交響曲は標題を持たず、音楽のみによって音楽を語る「絶対音楽」として書かれているが、この交響曲第6番は作曲者自身によって「田園」の標題が与えられている。しかも、それぞれの楽章に聴衆の理解の助けとなる標題が添えられている。通常であれば4つの楽章によって構成される交響曲が、5つの楽章で構成されるという点と合わせて、この「田園交響曲」はベートーヴェンの交響曲のなかでも異彩を放っている。

各楽章にふんだんに込められた描写性は、単に効果音を用いた自然描写に留まることなく、田舎の生活における感情の表出を意図したものである。ベートーヴェンは「絵画的な描写ではなく、田園での喜びが人々の心に引き起こす感情を描いた」と述べている。田園情緒や愉悦の感情は、作曲者の言葉の説明を借りるまでもなく伝わってくるだろう。

作曲は1808年。アン・デア・ウィーン劇場にて初演された。この演奏会では「田園」に加えて、交響曲第5番ハ短調「運命」、ピアノ協奏曲第4番ト長調、合唱幻想曲ハ短調他の作品もあわせて初演された。これだけの傑作が初演されたにもかかわらず、作品があまりに革新的だったためか、あるいはプログラムが長すぎたためか、公演は失敗に終わっている。

第1楽章は「田舎に着いたときの愉快的気分」。アレグロ・マ・ノン・トロツポ。序奏なしですぐに晴朗で柔らかな主題があらわれる。大らかで伸びやかな楽想が紡ぎだされ、風光明媚な田園風景を想起させる。野山の散策を好んだ作曲者の喜びが伝わってくる。

第2楽章は「小川のほとり」。アンダンテ・モルト・モート。流麗で穏やかな緩徐楽章。

たゆたうような8分の12拍子のリズムが、小川のせせらぎを連想させる。終盤にフルートがナイチンゲール、オーボエがウズラ、クラリネットがカッコウの鳴き声を模倣する。それぞれの鳥の名前は楽譜上に作曲者が明示したものである。

第3楽章は「田舎の人たちの楽しい集い」。アレグロ。スケルツォに相当するひなびた3拍子の舞曲。中間部では野趣にあふれた2拍子の舞曲があらわれ対比を作る。

陽気な集いはいつまでも続かない。切れ目なく第4楽章「雷と嵐」アレグロに突入し、不吉な遠雷が低弦で表現される。この楽章で初めてピッコロ、ティンパニ、トロンボーンが加わり、編成を増したオーケストラが激しい嵐となって襲いかかる。

荒れ狂う嵐はやがて収まる。ここでも切れ目なく、第5楽章「牧歌、嵐の後の喜びと感謝」アレグレットへと続く。悠然と奏でられる牧歌は次第に高潮し、このうえもなく陶酔的なクライマックスを築く。

楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦楽5部

Profile

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827)

ドイツに生まれウィーンで活躍した作曲家。ハイドン、モーツァルトに続いて古典派様式を受け継ぎ、さまざまな革新をもたらして後世の作曲家に巨大な影響を及ぼした。とりわけ9曲の交響曲は西洋音楽史における金字塔として名高い。音楽における主観性を明確に打ち出し、ドラマティックで雄大な個人様式を確立。耳疾により聴力を喪失したにもかかわらず、ヒロイズムや崇高さを音楽によって表現して、数々の傑作を残した。

